



賢いはたらき方のススメ🕒

古謝 美佐子さん

「童神(わらびがみ)」という曲をご存知だろうか?沖縄の子守唄としてこれまで多くの歌手にカバーされているが、今回紹介する沖縄民謡歌手の古謝美佐子(こじゃみさこ)さん(以下、古謝さん)の楽曲が原曲である。古謝さんの情感豊かな歌声は、沖縄方言が分からない聞き手の胸にも染み入る。沖縄民謡をこよなく愛する生来の歌手であり、まさに天職といえる。国内はもちろん海外公演をするようになって、生まれ育った沖縄を拠点に活動を続ける古謝さん。ご自身は「歌を仕事と意識したことはない」というものの、だからこそ、「今も新たな階段を登っている最中」と語られるほどストイックに好きな道を探求し、「生業」とするまでに至った生き方は、これからのビジネスパーソンにとっても、自身の仕事との向き合い方や生き方のヒントとなるだろう。

「理屈抜きで好きなこと」を極めればそれが自分の強みになる

— 沖縄音楽グループ「ネーネーズ」のリーダーを務めるなど、国内外で活躍された経歴をお持ちの古謝さんですが、本格的にプロとして活動を始めたのはいつ頃ですか?

古謝:初めてレコードを出したのは9歳のときですが、初舞台は幼稚園に通う前だから、もう60年ぐらい歌っていますね。物心つく前から、とにかく歌と踊りが大好きでしたので、歌を仕事と思ったことはないんです。今64歳ですが、沖縄では初めて会う人から「こんなに若い人だったの!」と驚かれます。長い間歌っているものだから、もう70歳か80歳だと思われているのでしょうね(笑)。

— 沖縄の民謡歌手として、沖縄の方には広く名前が知られていたわけですが、歌い始めたきっかけはどんなことでしたか?

古謝:沖縄芝居です。私が幼少の頃は、娯楽といえばテント小屋で上演される沖縄歌劇くらい。幼すぎて記憶にないのですが、叔母が毎日のように1歳半ぐらいの私の手を引いて通ったそうです。毎日観ているから、セリフも歌もすっかり覚えてしまって、2、3歳になると役者さんより先にセリフを言ったり、一緒に踊り出したりしていたそうです。

— 理屈抜きで歌が本当にお好きだったのですね。「仕事」と意識されていなくても、まさに天職ではないでしょうか。

古謝:ただ、母は私が歌を歌うことに大反対でした。当時、沖縄民謡のような芸能をやる人は「遊び人で仕事をしない」と見下される存在だったのです。そもそも「沖縄民謡は男のもの」という時代でしたから、伝統楽器の三線も「女や子どもが触れてはいけない」とよく叱られました。それでも隠れて弾いて遊んでいたのですが…。幼稚園のころでしたが、見つからないように、三線を拭いてから木箱にしまう知恵もつけました(笑)。

沖縄では家に親戚などが集まって宴会をするとき、景気づけに民謡を演奏する男性たちが、座敷の前のほうに陣取っているんです。私はちゃっかりその隣に座って出番を待っている。「このおじさんたちの次は、私が歌う番」と思っているわけです。それも母には叱られましたけれど、とにかく人前で歌うのが大好きでした。小学生の頃には、お祝いの席に呼ばれるようになり、朝・昼・晩と別の会場を掛け持ちして歌っていました。

歌を通じて育んだ縁が仕事のきっかけを運んだ

— 中学生になると民謡クラブに歌手として出演されていたということですが、歌手生活と学校を両立していたのですか。

古謝: 高校生まで民謡クラブで歌っていましたが、やはり仕事という意識はありませんでした。

母は、私が高校を卒業したら会社に勤めて事務仕事でもしてほしいと思っていたようですが、私にそんな気持ちはまったくなくて(笑)。卒業後すぐに民謡クラブで本格的に歌手として歌い始めました。



— そのあとご結婚されて、お子さんも生まれて、生活に変化が訪れましたね。

古謝: 結婚後も歌っていたのですが、2人目の娘ができたころ、夫に「歌は辞めて専業主婦になってほしい」と言われました。ずいぶん悩みましたが、1年ぐらひは辞めていた時期があります。その時は、髪も短く切ってしまいました。

— 沖縄民謡を歌う時は、髪を結って琉装ヘアにしなくてはならないのですよね。ということは、髪を切るのは勇気がいることではなかったかと思います。

古謝: ええ。髪を切ったら歌えなくなります。それなりに覚悟したのですが、三線の音が聞こえると胸騒ぎがして、居ても立ってもいられなくて…。

ある日、歌の先生が家に来て「髪もこれだけの長さがあればピンで留めたら結える」と言うので、いよいよ我慢できなくなって、また歌い始めてしまいました。その時の夫とは11年間生活したんですが、結局、私は人生で歌を選んだのです。

— お子さん2人を抱えて、大きな決断だったと思いますが…。

古謝: 歌が歌えないのは、我慢とストレスの多い生活でした。私がそういう状態で暮らし続けるよりも、やりたいことをしたい、子供たちにも両親のいさかひを見せたくない、との思いもありました。

人生で歌を選び離婚したら、気兼ねせず「歌って」と言えるようになったからか、いろんな人が声をかけてくれました。歌い手がほしい時に私を思い浮かべてくれる人たちがいたことは、本当にありがたいですね。福祉関係の仕事をしていた古い知り合いが、「慰問で歌いに来てくれん？」と誘ってくれたのもあって、あちこち歌いに行きました。彼はもう亡くなりましたが、つないでくれた縁はまだ続いていて、今もいろんなところに慰問で出かけています。

— 幼少期からずっと歌を続けてこられて、だからこそ、いったん歌をやめた後もそういったご縁に恵まれたのでしょうか。それでも、離婚した時には歌を生業にできるという確信はなく、保険として他の仕事も考えたことがあるとか。

古謝: 私は、会社勤めをしたこともなく、歌うことしかやったことがありません。ですが、子供を2人を抱えて「喉が潰れたらどうしよう」という不安はありました。それで考えた挙げ句、車の運転ならできると思って、タクシー会社に勤める同級生に問い合わせたら「二種免許があれば雇うよ」と言ってくれたんです。他に何もできないんですけど、車が大好きで、出かける時はいつも友人を乗せて私が運転するほどなのです。

いざというときのための保険ですから、集中しました。教習所では、たった20日間で自動車二種免許を取ったんですよ！おかげさまで、今まで使うことはありませんでしたが、今でも免許更新しています。

坂本龍一さんとの出会いが新たなキャリアにつながった

— 30歳で離婚された頃、歌のキャリアにも転機が訪れますね。

古謝：私にとっても大きな影響を与えたのは坂本龍一さんです。当時の私は、坂本さんもYMOも知らない。本土の音楽なんて何も分かりませんでした。親が戦争を経験しているから、小さい頃からヤマトンチュ（本土の人）は口がうまくて沖縄の人をだますと教え込まれてきたんです。親の言うことは絶対だったので、そう信じていて、沖縄方言ではない標準語の民謡さえ「ヤマトンチュに媚びる必要はない」と、頑なに歌わなかったくらいです。

— そういう強いポリシーがありながら、坂本さんのプロジェクトに参加されるのは、勇気が必要だったのではありませんか？

古謝：「坂本龍一という音楽家が、女性3名の沖縄民謡歌手を探している」と音楽仲間から声がかかって、1曲レコーディングするだけならいいか、とその話を受けたんです。地元の人気バンドにボーカルとして参加していたことから、民謡以外のミュージシャンとも交流があった時期で、そのつながりから舞い込んできたオファーでした。東京で1曲だけレコーディングしておしまい、というつもりで行ったんですが、録音した曲を聞いた坂本さんから「もう1曲歌ってほしい」と言われて…。それで歌った曲が『NEOGEO』というアルバム(1987年発売)のタイトル曲になったんです。



— キャリアとしては急展開ですね。

古謝：そのレコーディングを終えて沖縄に戻ったら、坂本さんのスタッフから電話がかかってきて、「国内ツアーが決まりました」と言われたんです。公民館で民謡を歌ったり、飲食店で島唄を歌ったりしている私たちには、「ツアー」と言われても、ぴんとこなくてきょとんとしてしまいました。「何を言ってるんだらう？」と思って、一度は断ったんです。そんなつもりでレコーディングを引き受けたわけじゃありませんでしたから。地元の仲間から声をかけられて沖縄民謡を歌いに行っただけで、坂本さんと何かしたかったわけではないんです。

— 坂本龍一さんのオファーを断ったわけですね。

古謝：いろいろ話し合っているうちに引くに引けなくなってしまうと、ツアーに参加したのですが、結局その体験が、歌にも私自身にも大きな変化をもたらしました。

一番変わったのは、ヤマトンチュに対する偏見が、鎖がボロボロと外れるように消えたことです。坂本さんやスタッフの皆さんと一緒に仕事をしてみて「なんだ、みんな(ヤマトンチュも)同じ人間じゃないか」と、そんな当たり前のことに30歳を過ぎてようやく気がついたんです。

— 坂本さんと出会ったことで、音楽的には何が変わりましたか。

古謝：音楽の中味が変わるということはありませんが、知らないことだらけだったから、新鮮で楽しかったです。民謡には拍子や小節という概念がないし、「アンコール」が何のことかさえ知りませんでした(笑)。でも、坂本さんは私たちの自由にやらせてくれました。自分の持ち分である曲のアレンジはきっちりやるけれど、歌の部分には一切干渉しないんです。坂本さんが作った曲に乗せ、自分たちで選んだ民謡を沖縄言葉のまま歌ったのですが、私たちの音楽を尊重してくれる方でしたから、やっていて楽しかったですね。

賢いはたらき方のススメ🕒

ただ、何小節とか分からないから、レコーディングもツアーも「歌い出しは絶対に合図を下さいね」とお願いして、坂本さんご本人から合図をいただいていた。まったく興味がなかった本土の音楽、それもテクノポップというジャンルとコラボレーションしたことで、私自身の視野が広がりましたね。坂本さんも何か感じてくださったみたいで、その後もご縁は続いています。

— その時の女性歌手たちと『ネーネーズ』を結成したわけですね。

古謝：ネーネーズも楽しかったですよ。アジアやハワイでレコーディングしたり、いろんなメディアの取材を受けたり。でもリーダーでしたから、不本意なこともありました。多分、仕事をしていたら誰もが直面するような問題だろうとは思いますが。

未来の自分は「今」の積み重ねでできている。

— 不本意というのは、メジャーデビューしたグループのリーダーになったことで、「好きで歌っている」だけでは済まなくなってきたということですか。

古謝：みんなを引っ張っていかなきゃいけないから、試練だと思って、沖縄の言葉ではない内地（本土）の言葉の歌にも挑戦しました。方言で歌う島唄はすぐに覚えられますけど、内地の歌は何度も歌い込まないと頭に入らない。さらに人前で繰り返し歌って、やっと自分のものになるんです。使い慣れない言葉で心をこめて歌うのは私にはとても難しいですが、この時はリーダーの責任感と、聴いてくれる方たちのためにも、苦手なことにも取り組みました。

— ポブ・マーリーの曲をカバーされたり、海外のアーティストと共演されたりと、沖縄民謡の枠を超えた創作活動をなさっていましたね。

古謝：ネーネーズは6年間、頑張ったんですが、どうしても利益や売上の話がついてまわります。好きな歌、やりたいと思う演奏ができなくなってきたことにも限界を感じました。“自分の歌”を歌いたいと思ったんです。

— キャリアを積み重ね、新しいことへの挑戦を経て、原点に立ち返ろうということですか。

古謝：私は沖縄民謡の中でも「情き歌（なさきうた）」が好きなんです。子供の頃から歌劇に慣れ親しんだ影響なんですけど、男女や親子の情を表現する情き歌が歌いたくて、ネーネーズを脱退し、小さなライブを始めました。

— そうして生まれた「童神（わらびがみ）」は、多くの人の胸に響きます。初めてのお孫さんがお生まれになった時の曲だそうですね。

古謝：あれは孫への思いというより、母親になる娘への思い、そして私を厳しく育てた母への思いが込められているんです。親子の情念というか。だから、とても個人的な歌ですが、聞いた人それぞれの思いがこの歌に共鳴するのかなと思います。

— 沖縄に根付く優しさというのでしょうか、情の深さというのでしょうか。家族も含めて人と人とのつながりを大切にする風土を感じます。

古謝：そこで生まれ育った私には、それが普通と思うところがありますが、例えば冠婚葬祭は盛大ですね。私の母のお葬式には800人ぐらいが参列しましたが、ほとんどが母の知り合いです。顔が広がった人ですから。

賢いはたらき方のススメ ㊦

結婚式も、新郎新婦の双方が交友関係の広い人だと600人ぐらい集まって、3時間ずっと余興が続くんです。私もサプライズで歌いに行くことがあります、隣の会場に来ていたお客さんから「いつも聞いています！」と声をかけられたついでに、知らない人の披露宴で歌ったことが何度かあるんです(笑)。

— 内地(本土)との生活の違いを感じます。

古謝:全然違いますね。私は、沖縄以外の土地に住もうとは思いません。ここ沖縄で暮らすからこそ、今の自分の歌があるわけで、沖縄を離れたら、民謡を忘れないように必死で稽古や勉強をしないとイケません。ここにいれば、自然と民謡が体に入ってくる。歌いたい時にいつでも歌えるし、ラジオをつければ民謡が流れてきますから。それに都会は、ビルは高すぎるし、人は多いし、電車の乗り方は分からないし(笑)。三線の練習をするのにも神経を使うでしょう?「うるさいって苦情がこないかな?」って。



人との接し方も違いますよね。私、「社交辞令」という言葉を本土に行くまで知らなかったんです。沖縄には、そういう概念はありませんから。だから本土でライブをする時も、長居はしません。すぐに沖縄に帰ります(笑)。今の夫と結婚して20年になりますが、一度も一緒に住んだことはありません。沖縄を離れられませんからね。仕事面では夫がしっかりとマネジメントしてくれるおかげで、私は地元でのびのびと暮らせるんです。

— そうして、ご自身がやりたいことをやり続けることで道を切り開いてこられたわけですが、今、再びネーネーズのメンバーと『うないぐみ』を結成して活動されていますね。

古謝:当時は「ついていけない」と言われ離れていったメンバーが「もう一度一緒にやりたい」と言ってきたんです。

— 「ついていけない」とはどういう意味でしょう?

古謝:彼女たちが独り立ちできるように三線も歌も稽古を厳しくやっていたんです。歌手は体が資本ですから、私自身もちろん、体調管理は厳しくしていましたし。それについてこられなくなったんですね。

だから今回は私の言うことを聞くなら、という条件で結成しました。60歳過ぎたら急にガタがくるとよく言われますが、実際、私たちもあと10年歌えるかどうか分からない。だから、歌や三線だけでなく生活面でも厳しく言います。いい歌を歌うためには、本人が健康じゃないとダメなので。食べる物に気を使うようになって、メンバーは前より元気になって病院もあまり行かなくなりました。

— 根っからの歌手でおられることと、民謡歌手としてのプロ意識がうかがえます。

古謝:プロ意識とは思っていないけれど、大好きな歌でも、去年と今年が変わり映えしないのはよくないと思うんです。ある人に「美佐子、お前の歌は50からだよ」と言われたことがあります。沖縄の歌は人生の積み重ね、年輪が大事なんです。だから、30歳のときに、40歳に向けての階段を一年ずつ登っていこう、体作りと歌作りをしていこうと決めました。私は一桁の年齢から歌っていますが、その時と10代、20代、そして今の歌が同じだったらおかしいじゃないですか。歌い手ならば、その年齢相応の歌が歌えないとイケないと思っています。今は70歳に向けての階段を一段ずつ登っているところです。

賢いはたらき方のススメ ㊦

取材後記

取材後、撮影した写真を見ていて気付いた。三線を手にしている古謝さんの表情は特に生き生きとしている。「歌が好き」「音楽が好き」という言葉では言い尽くせないような強く優しいオーラを放っている。自分らしく、好きなことを追い求められる場所がここ沖縄の地なのだ。こんな風に仕事と自分の居場所が密接に結びついた暮らしは憧れでもあるが、もしかしたらいよいよ本格的になるテレワークによって、私たちにもそんな働き方が模索できるかもしれない。

プロフィール

古謝美佐子(こじゃ・みさこ)

1954年沖縄県嘉手納町生まれ。沖縄民謡女性歌手。9才でレコードデビュー。86年より坂本龍一のユニットに参加。90年より「ネーネーズ」に参加。95年末脱退後ソロ活動再開。アルバム「天架ける橋」「廻る命」は高く評価され、代表曲「童神」は、夏川りみなど多くの歌手がカバー。アイルランドのバンド「チーフタンズ」の国内やアジアツアーにも参加。2014年から4人グループ「うないぐみ」の活動も始め、アルバム「うない島」や坂本龍一と共作シングル「弥勒世界報 - under-cooled」発表。作家・五木寛之が「いま最も凄い歌手」と絶賛する。

取材協力



ザ・ナハテラス

<https://www.terrace.co.jp/naha/>

沖縄県那覇市おもろまち2-14-1

Tel:098-844-1111



NTTコムウェア株式会社

URL: <https://www.nttcom.co.jp/>

WEB掲載: 2018.8